

◆表紙さまざま 万葉集（解説八ページ）



蓬 左 HÔSA

名古屋市蓬左文庫

NO. 56

HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室

歌書

一、歌書の古典 1 奈良・平安

四月十九日～五月十四日

五月十七日～六月十五日

二、歌書の古典 2 中世・近世

七月十二日～八月十三日

八月十六日～九月十四日

「歌書」とは、歌集や歌学、歌論についての書物をさす言葉です。蓬左文庫には、「万葉集」「古今集」などの古典的な歌書はもちろん、豪華な蒔絵の容器に納められ、大名調度として誂えられた歌書など、多くの歌書が伝来しています。また近年は、近世近代を中心とした雑賀重良氏の歌書のコレクションが加わり、さらに豊富な内容を持つようになりました。古典的な歌書を取りあげる前期二回をはじめ、今年度はこの雑賀氏のコレクションも加え、一年を通して蓬左文庫の様々な「歌書」を紹介します。

◆歌書の古典 1 奈良・平安

歌とはリズムを主として作られた文章の総称ともいえます。もともとはリズムとメロディをつけて歌われたものから始まり、文献の中に記載されることによってリズムを主体としたものに変質していきました。『古事記』『日本書紀』に収録された「記紀歌謡」あたりがその始まりですが、完結した「歌書」、「和歌集」としては、八世紀後半に成立した『万葉集』がわが国現存最古の歌集です。七世紀前半から八世紀中葉に至る約一五〇年間におよび総計四五〇〇首を収録する『万葉集』は、古代詩、古代

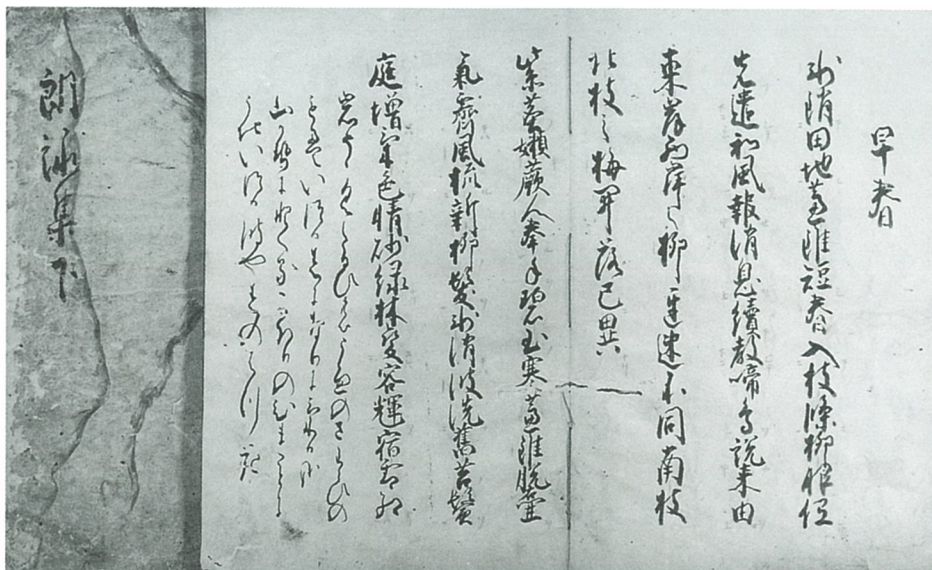
歌の宝庫であり、この後永く日本文学的主流であり続けた「和歌」の根源となったものです。

一方、「和歌」に対する「漢詩」のほうでは、万葉集より一足早く、最古の漢詩集『懷風藻』が成立しています。万葉集における「和歌」の開花に對して、九世紀前半、平安時代初期の文学の主流は、漢詩文であり、「凌雲新集」「文華秀麗集」「経国集」の三勅撰集が相次いで編纂されました。しかし、十世紀初頭、「古今和歌集」が漢詩集に代わって勅撰の和歌集として宮廷社会の表舞台に登場しました。『古今集』は平安京の宮廷的な美意識や季節感を集大成した規範的な古典であり、十五世紀に及ぶ二十一の勅撰集『二十一代集』を生み出す原動力となりました。四季の歌と恋の歌を中心とした構成をはじめ、後々まで歌集の規範となっています。

これに続いて『後撰集』『拾遺和歌集』と一世紀の間に「三代集」と総称される三つの勅撰集が編纂され、和歌は貴族社会の風雅な対話の道具としても用いられ、定着していきました。王朝文芸の円熟期にあたる十一世紀には、和歌は、歌会、歌合わせなど貴族社会の社交の場で華やかに展開しました。『拾遺和歌集』から八十年をへて編纂された『後拾遺和歌集』には、この時期の王朝文化が生んだ和歌が集大成されています。

院政期となる十二世紀には『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』と三つの勅撰集の編纂が行われましたが、この時期の和歌は専門化、技巧化の傾向を強め、武家の台頭、貴族政治の衰退とともに『新古今和歌集』に代表される中世和歌の世界を迎えることとなります。

貴族社会が衰退し、王朝文化の中で隆盛した歌の世界が新鮮さを失っても、歌の世界の知識、教養は、公的地位や教養の水準を示すものであり続けました。



和漢朗詠集 室町時代 2冊
25.5×17.0cm

朗詠（平安時代の儀式や饗宴の際、漢詩や和歌に節をつけて謡うこと）に適した漢詩と和歌を集めた詩歌集。11世紀頃の成立で、平安時代以来、能書家による写本の多いことでも知られる。

本書は、連歌師で、宗鑑流としてその書が珍重された山崎宗鑑の筆とされる。

二十一代集一覧

名称	巻数	撰 者	成立時期
1 古今和歌集	20	紀貫之他	10世紀初頭
2 後撰和歌集	20	清原元輔他	10世紀半ば
3 拾遺和歌集	20	花山法王又は藤原長能他	11世紀初頭
4 後拾遺和歌集	20	藤原通俊	11世紀末
5 金葉和歌集	10	源俊賴	12世紀前半
6 詞花和歌集	10	藤原顕輔	12世紀半ば
7 千載和歌集	20	藤原俊成	12世紀末
8 新古今和歌集	20	源通具他	13世紀初頭
9 新勅撰和歌集	20	藤原定家	13世紀前半
10 続後撰和歌集	20	藤原為家	13世紀半ば
11 続古今和歌集	20	藤原為家他	13世紀後半
12 続拾遺和歌集	20	二条為氏	13世紀末
13 新後撰和歌集	20	二条為世	14世紀初頭
14 玉葉和歌集	20	京極為兼	14世紀前半
15 続千載和歌集	20	二条為世	14世紀前半
16 続後拾遺和歌集	20	二条為定他	14世紀前半
17 風雅和歌集	20	花園法皇又は光厳上皇	14世紀半ば
18 新千載和歌集	20	二条為定	14世紀半ば
19 新拾遺和歌集	20	頼阿他	14世紀後半
20 新後拾遺和歌集	20	二条為重他	14世紀末
21 新続古今和歌集	20	飛鳥井雅世	15世紀前半

とくに万葉集から勅撰の「八代集」にいたる奈良朝、平安朝の歌書は、「古典中の古典」とよぶべきものであり、蓬左文庫に伝えられる尾張徳川家の旧蔵書の中には、藩主やその夫人達に関わるいく種類もの『万葉集』や『古今集』が伝えられています。

◆歌書の古典 2 中世・近世

『新古今和歌集』の成立は、平安朝の和歌の終焉と中世和歌の始まりを象徴するものです。この後応仁の乱が始まる十五世紀前半までに、十一の勅撰歌集が編纂されますが、和歌自身は形骸化の方向をたどりしました。一方で、二条家、京極家、冷泉家、飛鳥井家、東家などの専門的な「歌の家」と多くの歌論が成立し、中世は「歌学の時代」とも呼ばれています。『小倉百人一首』を編纂した藤原定家（一一六二～一二四一）は、中世を代表する歌人、歌学者、古典学者で、『新古今和歌集』『新勅撰和歌集』など勅撰集の撰者でもあります。また、『近代秀歌』

『詠歌大概』など多くの歌論を残していることでも知られ、彼の著した歌書は後世にわたって歌の世界で権威を持ち続けました。

形骸化の方向をたどった和歌に対して中世を代表する詩歌は、連歌です。連歌は、五、七、五の発句に始まり、七、七の脇句がこれを受け、さらに五、七、五の第三句に続き、以下長短二句を交互に重ねて百句に及ぶことを原則としています。十三世紀初頭には、和歌の会に対して連歌の会が催されるようになり、さらに専門の連歌師が誕生しました。連歌師の一人宗祇は、『新撰菟玖波集』を編纂するとともに、多くの連歌論を残しています。蓬左文庫には、宗祇をはじめ十四世紀から十六世紀にいたる連歌の最盛期に活躍した連歌師の著作の優れた写本が残されています。

しかし連歌もやがて権威化、形式化の道をたどり、それまで主流ではなかった滑稽、おかしみを主とする俳諧連歌が活況をみせるようになります。この俳

諧連歌から独立したのが俳諧で、近世には庶民層を中心に大きな広がりを見せます。

近世の歌の世界は、様々な分野で広範な作歌層を生み出したことであり、各地で多くの結社が発生しました。こうした広がり背景に、近世の出版文化の発達があったことを見逃すことは出来ません。写本を基調としていた歌書において、古典をふくめ各種の歌集や歌学、歌論書が量産されたことは、画期的なことであり、大きな意味を持っていました。

当時の有名作家および全国の新進作家の歌を集成したものに『鰯玉集』『鴨川集』があり、初学者のために、万葉以来の歌人の歌を集めた『類題怜野集』をはじめ多くの歌集、歌学入門書、歌語辞典などが、刊行されました。また、『万葉集』や『古今集』『新古今集』などの古典研究がさかに行われ、多くの注釈書が編纂、出版されています。これは、やがて「国学」となり、幕末期の政治思想にも影響をあたえました。

しかし、近世においても和歌自身には時代精神を代表する活況はなく、この役割を果たしたのは、俳諧やそこから派生した「川柳」、和歌を滑稽化した「狂歌」、漢詩をもじった「狂詩」などでした。こうした庶民文芸に属する歌書は、蓬左文庫においては、江戸文学のコレクションとして知られる「尾崎久弥コレクション」のなかに見ることが出来ます。

次回展示

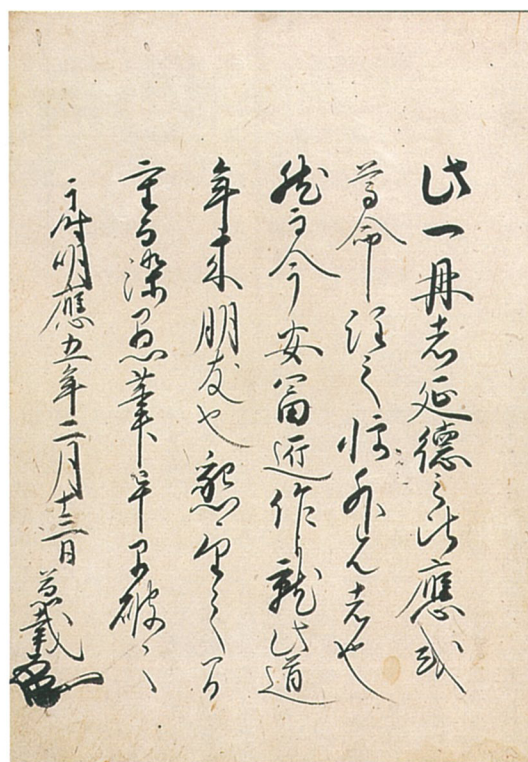
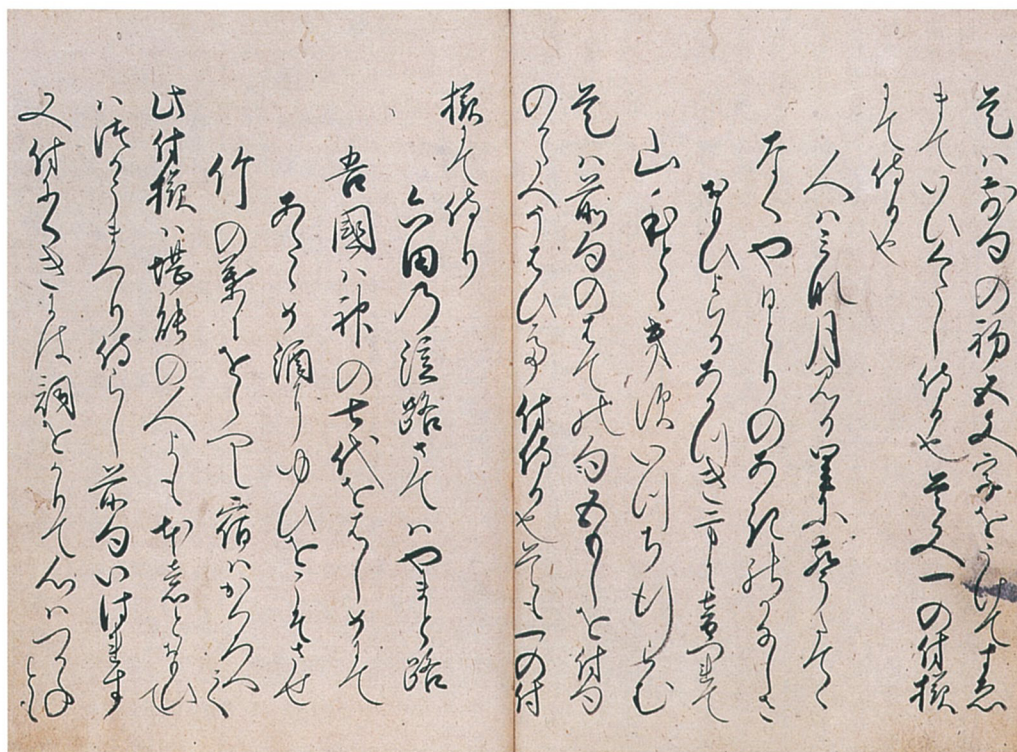
歌書

三、大名調度としての歌書

四、雑賀重良収集歌書展

1 / 10 / 2 / 8

2 / 21 / 3 / 22



連歌延徳抄

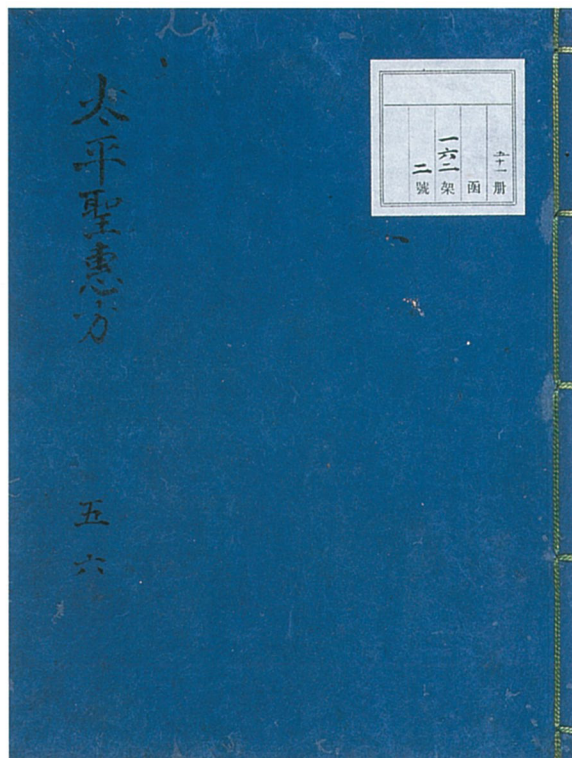
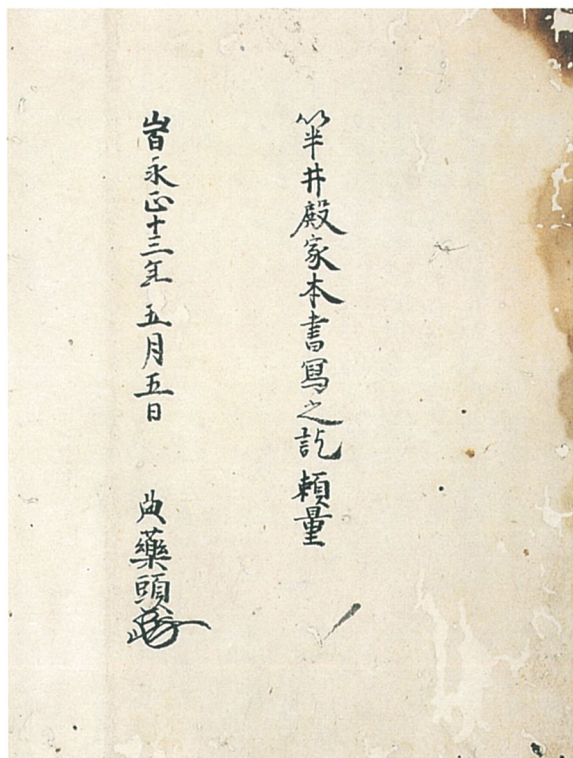
1冊 猪苗代兼載著

明応5年(1496)自筆本 27.4×20.4cm

室町時代に活躍した連歌師猪苗代兼載(1452～1510)による連歌の解説書。師の心敬(1406～75)をはじめ連歌の先人の句を挙げて解説している。

兼載は、38歳にして宗祇の跡を受けて北野連歌会奉行・宗匠という地下連歌会最高の栄職に就いた人

物である。『連歌延徳抄』は、延徳2年(1490)頃、周防下向中に大内政弘に献じたものが最初だが、本書は明応5年に訂正した再選本に属し、兼載自筆の代表的写本である。巻末には著者自筆の明応5年2月13日付の奥書がある。



太平聖恵方 100巻51冊 王懷隱編 永正年間写 26.7×20.8cm

中国北宋の太平興国4年(980)、太宗の命により編纂された中国宋時代の代表的医学書。

殆どが明治初年に処分されてしまった「御文庫」の吉通の蔵書の中で、一件だけ現在まで伝えられるもの。永正年間(1504~21)に半井家所蔵本を丹波家の祖頼量が書写したという奥書を持っており、書写した原本は中国南宋時代紹興17年(1147)の刊本である。

寛政6年(1794)、幕府医官丹波元恵の手によって尾張

徳川家所蔵の『太平聖恵方』全巻の校訂、謄写が行なわれ幕府に納められた際に使用されたのが本書で巻末に「書太平聖恵方後」と題した丹波元恵の一文が綴じ込まれている。

なお、尾張徳川家には本書の他に家康の遺品として初代藩主義直が駿河御譲本として譲り受けた金沢文庫旧蔵の宋版の『太平聖恵方』があり、現在蓬左文庫に伝来している。

尾張藩御文庫の蔵書

— その3

四代藩主吉通の蔵書

1、御側御書物奉行と四代藩主吉通

初代藩主義直の収集によって基礎が作られた尾張藩の「御文庫」が、駿河御讓本（家康の死後遺品として義直に贈られた家康の蔵書）を含む、前代までの藩主が残した書物を管理する「御文庫」（表御書物蔵）と当代の藩主が利用する書物を管理する「奥御文庫」（または御側御文庫）に機能分化したのは二代藩主光友の時代である。義直の死後その蔵書を受け継いだ光友が、自身が常時利用する書物を除いて、家康・義直の蔵書を尾張徳川家の蔵書として後世に伝えるべく「表」の書物・尾張徳川家の格式にふさわしい書物として管理しようとしたのがその始まりであろう。この結果、万治元年（一六五八）、「御文庫」には、これを管理する書物奉行がおかれた。一方、「奥御文庫」には通常、専任の書物奉行はおかれず、藩主の側近がその管理にあつたが、一度だけこの「奥御文庫」に御側御書物奉行がおかれたことがあつた。これが、四代藩主吉通の治世（一六九一—一七一三）であつた。

吉通は、元禄二年（一六八九）、三代藩主となる綱誠の第十番目の男子として誕生した。兄たちは、彼が四歳になるまでに夭折、さらに、二代光友の隠居によって藩主となつた父綱誠が、就任後六年にして、四十七歳で急死したため、元禄十二年、十歳で尾張藩主となつた。幼い藩主は、父綱誠が最も信頼をおいた弟で叔父に当たる尾張家の分家高須家の初代松平義行の薫陶を受け、武技を習得し、兵学を講じる一方、儒学・神道・国学を修めたという。吉通は、正徳三年（一七一三）満二十四歳にして原因不明の急死を遂げるが、存命であれば、人物、門地とも

問題なく吉宗に代わつて八代將軍になるはずであつたともいわれる。死の直前に、側近に伝えた幼い跡継ぎのための尾張藩主としての心構え『円覚院様御伝十五箇条』に盛り込まれた初代藩主義直以来の勤王思想が、明治維新に際しての尾張藩の決定に影響を与えたとされる。

とはいえ吉通の人物については諸説に相当な隔たりがある。尾張藩士朝日重章の日記『鸚鵡籠中記』は吉通が酒好きで節度がないこと、急死の原因も大酒によるらしく、尾張藩主らしからぬ異常な臨終であつたことを伝えている。

一方、吉通が不可解な急死を遂げる直前の数カ月間を側近として仕えた近松茂矩（一六〇七—一七七八）が後にその著作において描いた吉通は、尊皇の志篤く、国防に関心をもち、平素から兵馬の訓練を怠らない藩主であり、医学を学んで自ら薬を調合し、医者を集めて輪講を行うほどの学問熱心な人物である。

何れも吉通の一面を伝えているのであろうが、吉通に対する風評が芳しくない背景には、実母に当たる本寿院の品行がわるく、宝永二年には、幕府から蟄居を申しつけられるほどで、尾張藩士たちの批判的であつたことなども影響していたものと考えられる。

2、吉通の蔵書

吉通の蔵書についての記録は、寛保三年（一七四三）、当時の書物奉行赤松新助が書写した「円覚院様御医書」と題した目録がもっとも古い記録である。この目録には、正徳二年から元文年間にある注記

があり、原本は吉通の存命中からの目録と考えられる。これには、約一七〇〇件三〇〇〇点が記されており、六〇件一二九点の兵書以外は総て医書である。この目録によると、兵書は、白木箱一個に、数十冊、百冊を超える大部な医書はそれぞれ本箱に納められており、この他は七つの長持に次のように納められている。

「一番御長持 唐本（五十六件） 二番御長持 和（四十五件） 三番御長持 外科金瘡馬書（二百六十五件） 同御長持之内馬書（六十七件） 四番御長持 婦人書（百件） 同御長持之内小兒書（八十四件） 同御長持之内眼書（六十三件） 五番御長持（三百五十三件） 六番御長持（三百五十三件） 七番御長持（二百四十四件）」

吉通はその在世中ほとんどを江戸で過ごしている。「正徳三巳四月」「正徳二辰十月十五日」と記された注記に「尾州より取寄上る」とあるところから江戸に置かれた蔵書の目録であつたものと考えられる。

一方、十八世紀後半まで書き継がれた「尾州定置御書物目録」または「御側御書物目録」と呼ばれる「奥御文庫」の目録には、「御医書」と題した項目があり、医書約一四〇件一三〇〇冊が記されている。この中には「円覚院様御医書入長持式棹」とあるものや「円覚院様御座右之御品与相見候」といった注記があるものがあり、少なからず吉通の蔵書が含まれていたことは間違いないさうである。こうした例も合わせると、吉通の蔵書は四〇〇〇点前後にも及ぶものと考えられ、御文庫の蔵書の基礎を築いた初代義直、二代光友に継ぐ蔵書数である。とくに草創期の各分野に偏りのない収集とは異なり、吉通の個性を明確に反映した蔵書である点に最大の特徴があり、ここまで徹底した例は他の歴代藩主では確認できない。

吉通の蔵書は、目録によると聖濟総録二〇六冊、證治準繩一二〇冊、太平聖恵方五一冊などの大部な

貴重書もあるが、一つの長持に五百点近い書物が収められており、小冊子が多かったようだ。書名の中には「写掛け御医書」とされたものや吉通による薬の諸方とみられる「御薬法御手鑑」などがあることから、吉通自身による医書の写や抜書、ノートなども含まれていたものと考えられる。

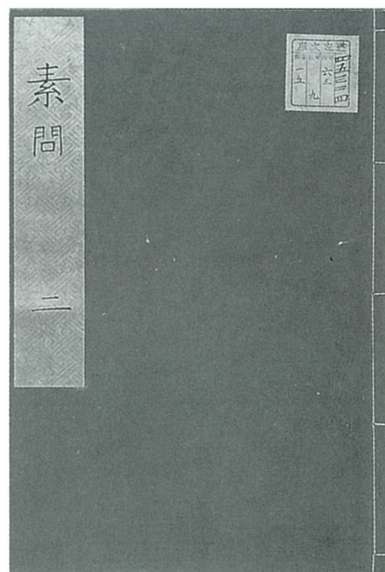
吉通はこれら数千冊の蔵書を常に手元に置いて医学、兵学の勉強に勤しんだのであろう。故に吉通の蔵書を管理する専任の御側御書物奉行が必要であったものと考えられる。

また、目録には、それぞれの書物について表紙や題簽の色、形態の記述があり、「花色」（縹色つゆ草色）の表紙、「花色金題簽」といった記述が数多くみられる。吉通の生きた時代の好みでもあろうが、吉通の蔵書の性格からみて吉通の好みの一端を示しているものといえよう。

寛保三年に作成された「御文庫」の目録によると前述の「田覚院様御医書」に記されていた書物のほとんどは、「御文庫」に納められたようだ。ただし吉通が残した医書には、吉通自身による書籍からの抜書をはじめとして細かな小冊子も多かったためであろうか。寛政四年（二七九二）、それぞれ八五五冊と九八五冊が納められた長持二樟が「御文庫」から「奥御文庫」に移されている。

この後吉通の蔵書に大きな移動は見られないが、明治初年の書籍払い出しの際、「御文庫」にあったものは、「太平聖恵方」の写本五一冊（5頁口絵参照）を除いてすべて処分されている。一方、「奥御文庫」の方の払い出し記録によると、前述の「御医書」の項の一四二件の内、寛政四年に移された長持二樟をはじめ一三二件が払い出された事となっている。（徳川林政史研究所蔵『御側御書物目録写』なお、払い出しを示す「払」の印記のあるもの内、一部蓬左文庫に現存するものもある。）

また、蓬左文庫に現存する医書の中には、吉通が



毎日その講義を受けたという轟竹庵の著作や下記の写真『黄帝内経素問・同霊枢』があり、いずれもよく似た花色の表紙で、金題簽によく似た文字で表題が書かれている。現存する目録上で書名、冊数を符合させることができないものの、吉通の旧蔵である可能性は高い。いずれも「尾府内庫図書」の印記がある。「奥御文庫」の蔵書であるため、「御文庫」ほど藩主ごとの完備した記録はなく、記録の上から旧蔵の藩主を特定することはむずかしい。

さらに蓬左文庫には天明七年（一七八七）新写の『聖濟総録』が所蔵されているが、これは、当時御文庫にあった吉通旧蔵の同書があまり整った写本ではなかったため、もう一部作成されたもので、吉通の旧蔵書の方が明治初年に処分されている。

吉通の蔵書は、尾張藩の蔵書のなかで、数の上でも大部な個性的な蔵書群を形成していた。しかし、医学書という性格が明治初年の払い出しの際には災いしたといえよう。残された多くの記録や手がかりに比して、現在の蓬左文庫の蔵書から吉通の蔵書群を復元することは困難なのである。（文責 桐原）

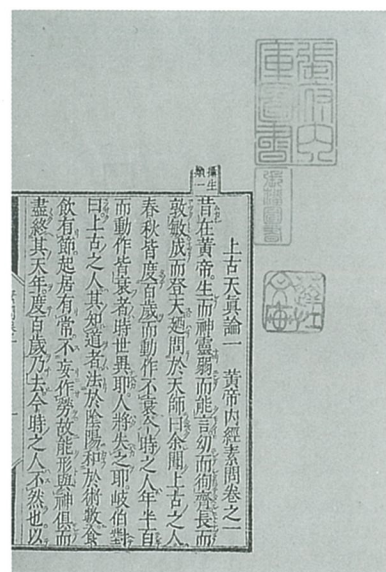
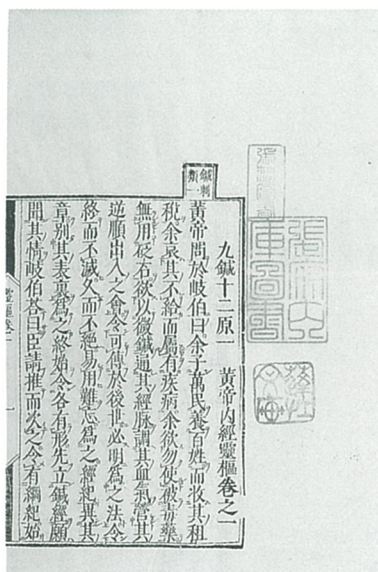
参考文献・山本裕子「尾張藩御文庫について」『名古屋博物館研究紀要九』

黄帝内経素問 黄帝内経靈枢 18巻15冊
江戸時代中期刊 35.8×24.0cm

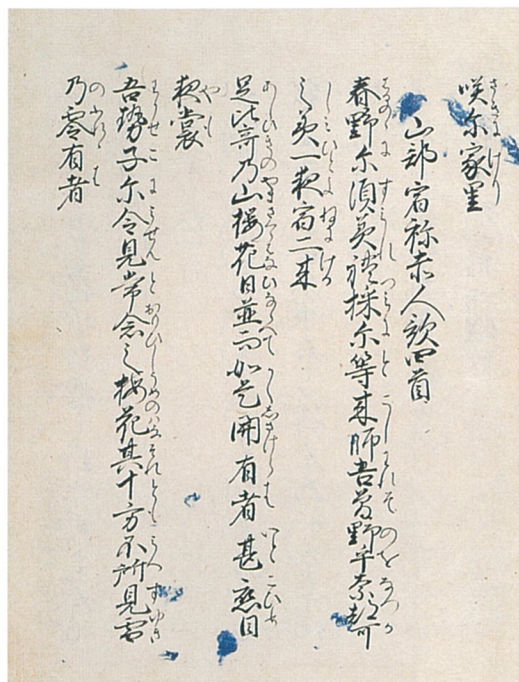
「黄帝内経」は、紀元前二世紀頃、黄河流域の漢民族の間に発達した医学を集成した書物。漢の時代に医学書としての形を整え、現存するものは「素問」（医学概論）と靈枢（鍼灸書）に分かれている。

本書は、十七世紀後半から十八世紀にいたる江戸時代半ばにわが国で印刷されたもの。藩主のために整えられた特製本とみられ、全体の大きさに対して判型が小さく不釣り合いなのは、既存の版木を使用して上質の鳥の子紙に刷ったためであろう。

また、花色の表紙に金箔押しの題簽という吉通の蔵書目録に頻繁に登場する装丁で、目録に記載された書名、冊数は完全に符合しないが吉通の蔵書である可能性は高い。



万葉集



『万葉集』20巻20冊
江戸時代初期写
23.6×17.3cm

紫の地色に龍と梅の花をあしらった文様を織りだした絹の表紙に金泥で霞をひいた題簽、端正な文字で「万葉集」と記されている。見返しは布目の斐紙に金箔を一面に押し、さらに青金の切箔を散らしている。料紙は藍の織維を雲のように漉き込んだ飛雲の布目紙、本文は数人の手によると推定され、いずれも端正な整った文字である。どれをとっても手の込んだ豪華な装飾をほどこしながら、調和のとれた落ち着いた雰囲気にとめられている。

『万葉集』は、八世紀に編纂されたわが国最古の総合的大歌集である。本書は、江戸時代初期と推定される写本で、鎌倉時代の僧仙覚が当時の諸本を校合してカタカナの訓を付した「新点本」とよばれる系統に属する。ただし、本書のように平仮名で訓の付されているものは珍しく、もともと女性用に整えられたものとも考えられる。

一八世紀半ばの御文庫の目録では、寛保元

年(一七四一)に御文庫に移された四代藩主吉通の生母本寿院(一七三九)の蔵書と記載されている。本寿院は、二五〇石取りの尾張藩士の家に生まれ、三代藩主綱誠の側室となった。綱誠にも吉通にも早くに先立たれた本寿院には「尾張千姫」などという異名が示すようにあまり芳しい逸話がない。

本書は大名家などからの贈答品であったのかもしれないし、義直や光友の夫人達の蔵書を受け継いだものであったかもしれない。目録の注記には、「写本、表紙綴子、裏金とりのこ紙、内箱外箱共二溜塗銘書金粉」とある。金文字で「万葉集」と記された溜塗りの二重箱におさめられていたことになるが、残念ながら現在この箱は残されていない。

本書はいつた人は御文庫に納められたものの、その豪華さゆえであろう、御文庫からはまもなく持ち出され、調度のひとつとして使用されたようである。

蓬左文庫は、蔵書点検のため下記のように休館させていただきます。

期間 平成9年6月17日(火)～6月29日(日)

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地
☎(052) 9 3 5 - 2 1 7 3

◆交通

名古屋駅、栄より
市バス(基幹バス2番)・名鉄バス(「本地ヶ原方面」行)
「新出来」下車、徒歩5分
大曽根より
JR中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

開館時間 午前9時30分～午後5時
休館日 毎月曜日、第3金曜日
祝日(日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開館、月、火休館)
特別整理期間(2週間)
年末年始(12月28日～1月4日)
閲覧 館内のみ。館外貸し出しはいたしません。
閲覧時間 閉架図書 午前9時30分～12時
午後1時～5時
開架図書 午前9時30分～午後5時
複写サービス 保存上支障のないものについて、マイクロフィルム複写などの方法により行ないます。
電話・郵便による申込みも可。
取扱い時間 午前9時30分～12時 午後1時～5時
展示 30件程度の所蔵資料を随時展示。テーマ、期間、回数は、年度により異なります。

「蓬左」第56号 ☆平成9年4月19日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：菱源印刷工業(株)